高貴の系譜
—メルヴィルの史的感覚とその背景—

星野　勝利

Rally, Mohawks! Bring out axes, and tell King George we'll pay no taxes!
—War-whooping at the BostonTea Party

It is my determined resolution...to defend this fort... in behalf of the United American States.
—Peter Gansevoort, Col., at Fort Stanwix

Never speak that name to me again. There was much blood! too much blood! Let us say no more about it.
—Mohawk Sachem Joseph Brant

1. はじめに

シェイクスピアの『テンペスト』はさる無人島に設定されている。旧ミラノ大公である魔術師プロスペローとその娘ミランダは、難破した船を逃れてこの島に上陸する。上陸した二人は、やがてそこで、妖精や蛮人やかつての仇敵たちが複雑に絡みあう不思議な世界を体験する。その終わり近くで、恋人と無事結ばれることになったミランダは、思いを込めて次のようにいう。

O, wonder!
How many goodly creatures are there here!
How beauteous mankind is! O brave new world,
That has such people in't! (Act 5, sc. 1)

アメリカの文化や文学を学ぶ際の必読書として、レオ・マークスの『楽園と機械文明』がある。この本でマークスが試みるのは、パストラル（牧歌）という西欧伝統の詩の型式を通して、アメリカの文化や文学の特質を理解することである。パストラルとは、基本的に、羊飼いの平和で幸福な緑の世界を意味する。マークスは、この型式を援用して論を展開する過程で、上記シェイクスピアの『テンペ

スト』に言及する。理由は、この作品もまた伝統的パストラルの構造を内包すると考えられるからであり、しかもミランダが口にする「すばらしい新世界（brave new world）」ということばには、新たに発見された「新世界」としてのアメリカの姿が重なるからである。

『テンペスト』は1611年に書かれたとされている。当時、新世界アメリカは、イギリスの大衆の関心事であったという。じっさい、4年前の1607年には、新世界バージニアのジェームズタウンにイギリス最初の植民地が建設され、それを報告する本も出版されている。その2年後の1609年には、新世界を目指したイギリスの船がバミューダ近海で遭難するという海難事故があり、その報告書も広く読まれていたという。報告書の作者の一人と、シェイクスピアは、親しい関係にあったともいう。このころの観客の関心は、魔術や権力闘争や新世界にあったというが、シェイクスピアはこの作品に、そのうちの一つである新世界を盛り込んだことになる。社会の状況や過去や現在の現実への広く深い目配り——シェイクスピアは「百万の心（myriad-minded）」を持つとされるが、ミランダの「新世界」は、その一つということになる。

時代を下って、新世界アメリカで、19世紀中ごろ、「第二のシェイクスピア」（ブライアント『メルヴィル研究必携』）と呼ばれる作家が生まれる。ハーマン・メルヴィル（1819-1891）である。代表作『モウビィ・ディック』（1851）は、巨鯨に脚を食いちぎられた隻脚の船長が、復讐のためにその鯨を追う物語である。これを語るのは、捕鯨船の乗組員としてこの船長と生活を共にした青年イシュメイルである。巨大な鯨との壮絶な闘いの唯一の生き残りであるこの青年は、作品冒頭で、海に出るときの自分の思いを詳細に語る。海に出るのは、自殺を避けるためであり、水に向かうのは人間の本性であり、海には、人を惹きつけて止まない魔法のような力が潜むこと——これらについて雄弁に語る。その際イシュメイルは、海に出る自分の行動を、「運命」という舞台監督が司る「出し物」として眺める。そして、そのプログラムは、こうなるはずだという。

'Grand Contested Election for the Presidency of the United States.'
'WHALING VOYAGE BY ONE ISHMAEL.'
'BLOODY BATTLE IN AFGANISTAN.' (Ch.1)

イシュメイルのことばは、ユーモアにあふれている。荒唐無稽なふざけた話しのようにも思われる。舞台監督としての「運命」は、さながら魔法を操る魔術師プロスペローのようでもある。しかし、2番目のプログアム「イシュメイルの捕

鯨航海」を挟んだ前後二つのプログラムは、じつは、作家メルヴィルを取り巻く現実の歴史の反映と見ることができる。『モウビィ・ディック』の出版は1851年であるが、そう遠くない過去である1840年には、ホイッグ党候補ハリソンと民主党候補ヴァン・ビューレンの間で、国を二分する激しい大統領選挙が闘われている。また、2年度の1842年1月には、アフガニスタンのカブールで、イギリス兵が虐殺されるという悲劇的事件が起きている。すなわち、イシュメイルが海に出たのは、この二つの出来事（プログラム）の中間の1841年頃ということになる。ところがメルヴィルは、1841年1月3日、捕鯨船アクシュネット号で現実に海に出ている。本家のシェイクスピアと同様、新世界の「第二のシェイクスピア」も、身の回りの現実をさりげなく作品に取り込んでいるのである。

シェイクスピアやメルヴィルのこのような姿勢は、社会の状況や歴史の現実を客観的に眺める視点という意味で、社会的観点、あるいは史的感覚ということばで捉えることができるかもしれない。しかしこのような観点、あるいは感覚は、より具体的に、どのような特徴をもち、どのような背景をもつものなのであろうか。とりわけメルヴィルの場合はどうか。

2. 歴史の諸相

メルヴィルは処女作『タイピー』で作家の歩みをはじめる。1846年出版、27歳の時である。ここで語られるのは、アメリカの青年（トンモ）のポリネシアでの体験である。捕鯨船を脱走した青年が、マルケサス諸島の一つヌクヒヴァ島で、食人種タイピー族の中に紛れ込み、そこで、文明世界とは異なる未開の世界を体験する。これについて語るのがメルヴィルの試みたことである。

未知の世界の体験を語るという点で、この作品は一種のピカレスク的な冒険譚である。しかしメルヴィルはその顛末をただ面白おかしく語るだけではない。語り手の目を通して、現実のポリネシアの在りように鋭い目を向ける。このことはこの本の副題にも十分に示されている。イギリスのジョン・マレー社から「コロニアル・シリーズ」の一巻として出版された時、この本には、「マルケサス諸島の谷に四ヶ月間生活した折りのポリネシア生活の瞥見、およびフランスのタヒチ島占領とサンドイッチ諸島のポーリット卿への暫定的譲渡についての記録」という、長々しい副題が添えられた。ジャーナリスティックな報告書であることを示唆するような副題である。

語り手トンモの体験は、メルヴィルの現実の体験と重なる。1842年、メルヴィルは、仲間の一人とともに捕鯨船アクシュネット号から脱走して、蛮人が住む未開の谷に逃げ込む。このころ太平洋では、ヨーロッパの文明（キリスト教文明）

が、ひたすら「西」にむけて進んでいた。後の作品『マーディ』(1849) のことばを拝借すれば、「西へ、西へ！人類も、帝国も、群衆も、隊商も、陸軍も、海軍も、世界も、太陽も、星も、あらゆるものが彼方に向かう！西へ、西へ！果てしなき地平！永遠の目標！」(168 章) という時代であった。帝国主義花盛りの時代である。脱走青年メルヴィルは、この時期の太平洋をポリネシアで体験する。

『タイピー』はこの側面についても語る作品である。語りの口調は、かなり率直、そして批判的である。批判の鉾先は、キリスト教の宣教活動や、先進文明国フランス、イギリス、アメリカの間で繰り広げられる帝国主義的活動である。つまりは、未開と文明の相克に関わる諸々の問題である。具体的には、原住民の改宗のため「150 人ほどを殺害した」(1 章) というフランス海軍の冷酷な仕打ちであり、「異教の悪」(24 章) をことさら誇張する偏向した宣教活動である。あるいは、島の領有をめぐる先進国間の確執などである。

これらについて語るとき、語り手の口調はかなり熱を帯びたものになる。次の一節は、その好個の例である。未開の地に「大きなカヌー」でやってくるヨーロッパ人の訪問は、未開の人々にとっては、実は「死の抱擁」でしかない。優しくそれを迎える人々の心を、「愛」から「憎悪」へと反転させかねない「毒蛇」の働きをするものである。

When the inhabitants of some sequestered island first descry the "big canoe" of the Europeans rolling through the blue waters towards their shores, they rush down to the beach in crowds, and with open arms stand ready to embrace the strangers. Fatal embrace! They fold to their bosoms the vipers whose sting is destined to poison all their joys; and the instinctive feeling of love within their breasts is soon converted into the bitterest hate. (Ch. 4)

『タイピー』が単なる冒険譚の域を超えて、このような傾向を保つ作品になったことを、メルヴィルは十分意識している。作品冒頭の「序文」には、「ほかの作品でなら許されないようないくつかの脱線は、サンドイッチ諸島やマルケサス諸島、ソシエテ諸島で近年生じている重大事件への関心が、アメリカやイギリスをはじめとして、世界中でかなりのものであることを思うならば、許されることであろう」ということばが記されている。現実を批判的に語り過ぎることへの予防線として読むべきだろう。

しかし、過度なまでに現実について語る視点を、なぜメルヴィルは作品中に取り込むことになったのか。『タイピー』の個別的特徴に過ぎないものなのか、そう

ではないのか。このような問いが生じてくるが、以後のメルヴィルの作品を眺めてみると、この視点が、むしろ一貫して、作家メルヴィルの特有の視点であると思われてくる。

『モウビィ・ディック』の例は、上に見た通りである。軽妙な語りの中に、アメリカや世界の歴史的現実が正確に埋め込まれていた。類似の例は、ほかにも無数に挙げることができる。小説に限ってみても、次作『オムー』(1847) は『タイピー』の延長線上にある作品であるし、『レッドバーン』(1849) や『ホワイト・ジャケット』(1850) は、メルヴィルの個人的体験を土台とした作品である。現実との接点は必然的に多くなる。また、『モウビィ・ディック』に続く作品『ピエール』(1852) の素材は、メルヴィルの家族〔母方〕の歴史であると考えられるし、『詐欺師』(1857) では、ミシシッピー川に浮かぶ客船を通して、19 世紀中葉アメリカ中西部の姿が提示される。同時に、ロンドンの水晶宮で 1851 年に開催された万国博覧会の時期の社会の状況も示唆される。遺作『ビリー・バッド』(1924) は、表向きは 18 世紀末フランス革命当時のイギリス艦船を舞台とする物語である。しかしその素材が、アメリカ軍艦ソマーズ号上で 1842 年に起きた反乱事件であることは、広く指摘されているところである。

それにしてもメルヴィルは、社会の現実や歴史の諸相に、なぜこれほどまでにこだわるのであろうか。こだわりの対象は何なのか。

3. 荒野の前衛

この観点で眺めたとき、浮かび出るのは、メルヴィルの作品中で占める「アメリカ」の存在の大きさである。生を受けた国としてのアメリカ、新世界としてのアメリカ、共和制国家アメリカ、キリスト教国アメリカ、インディアンや奴隷を抱える国アメリカ——メルヴィルの作品では、これらが、さまざまな形をとって随所で言及される。

たとえば、大西洋を越えてはじめてイギリスを訪れた『レッドバーン』の青年ウィリンバラ・レッドバーンは、そこでアメリカを目指しているドイツ人移民の集団を目にする。それを見たレッドバーンが改めて意識するのは、自分が後にしてきた祖国アメリカが「新世界」であることである。すなわち、「敬虔な心を持つ人たちがコロンブスの時代よりも昔から求めてきた彼岸の世界」としての「地上の楽園」(33 章) であることである。『レッドバーン』に続く『ホワイト・ジャケット』は、軍艦の日常生活を描く作品である。アメリカ海軍の艦艇では、前近代的陋習というべき鞭打ちの刑 (鞭刑) が採用されている。これを目にした語り手 (新米の船乗り) は、過去のくびきを断ち切り、未来を開くことこそアメリカ人

のなすべき事ではないかとの視点から、こう語る。

We Americans are the peculiar, chosen people—the Israel of our time; we bear the ark of the liberties of the world. Seventy years ago we escaped from thrall; and besides our first birth-right—embracing one continent of earth—God has given to us, for a future inheritance, the broad domains of the political pagans, that shall yet to come and lie down under the shade of our ark, without bloody hands being lifted. God has predestinated, mankind expects, great things from our race; and great things we feel in our soul. The rest of the nations must soon be in our rear. We are the pioneers of the world; the advance-guard, sent on through the wilderness of untried things, to break a new path in the New World that is ours. (Ch. 36)

力強いことばである。アメリカ人は「特別に選ばれた民」であり、「現代のイスラエル」であり、「未開の荒野」に送り出された「前衛」である。いわゆる契約思想でとらえられたアメリカ、ピューリタンの祖先たちが思い描いた乳と蜜の流れるカナンの地としての「新世界」である。「70 年前の隷属からの脱出」とは（ちなみに、この本の出版は 1850 年、70 年前は 1780 年、すなわち新国家アメリカ成立の時期）、つまるところモーゼの「出エジプト」にほかならない。旧来の陋習はこのような国のやるべき事ではない。これがこの語り手の見方である。

この種のアメリカ観は、続く作品『モウビィ・ディック』でも敷衍される。植民地というくびきを断ち切ったアメリカは、民主主義の新国家となる。一見暴君的なエイハブ船長は、一等航海士スターバックにいわせれば、「上にあるものすべて」に対しては、じつは「民主主義者」（38 章）である。一方、このスターバックを尊敬するイシュメイルは、スターバックに見られる「人間としての威厳」を、「神から無際限に放射される民主主義的威厳」（26 章）として眺める。エイハブも、スターバックも、イシュメイルも、つまりは新しいアメリカ人である。

第三作『マーディ』では、アメリカの国のかたちが、カリカチュアとして提示される。幻の少女を追う一団が訪れたさる島国（ヴィヴェンツァ）は、「いなごと野蜜を食べながら荒野から叫んだ予言者ヨハネ」（146 章）のような国である。「朝日のように約束に満ちた」（同）国でもある。また、「すべての人が自由かつ平等」（157 章）に生まれている国である。どう見てもこの国は、光あふれる契約の国、民主主義の国としてのアメリカである。

しかしメルヴィルのアメリカは、これがすべてであるわけではない。ヴィヴェンツァも例外ではない。国是とする「自由と平等」には、「ただしハモ族を除く」

（157 章）という奇妙な条件がついている。しかもこの国は、「よその国を取り崩し、少しずつ自分の国に加えている」（162 章）ともいう。『マーディ』の出版は 1849 年、対メキシコ戦争（1846-48 年）が終わったばかりの年である。ヴィヴェンツァが、どの国のカリカチュアか、誰の目にも明らかである。

光の国の対極としての闇の国アメリカ——この側面を、メルヴィルはかなり執拗に追跡する。「上の者に対する民主主義者」であるエイハブ船長は、「アダム以来の全人類の怒りと憎しみ」（41 章）を代表して「捉えがたい悪」（同）としての白い鯨に立ち向かう。このエイハブは、神々しい目的を持つ船長として、さながら「十字架上のキリスト」（28 章）である。ところが、鯨油の採取という捕鯨船の本来の目的よりも、復讐という個人的目的を最優先する行為は、名前の通り、旧約「列王記」の暴君アハブのそれと重なる。しかも、エイハブが船長として君臨する捕鯨船（ピークォッド号）は、白人入植者によって絶滅させられたインディアン部族の名前（ピークォッド族）名前を持っている。見方によっては、エイハブは、土着のインディアンの犠牲の上に建設された新しい白人国家のリーダーとも見えてくる。エイハブに闇が宿ることは明白である。

「ベニト・セレノ」（1856）や『詐欺師』（1857）でも、この闇は濃密に描かれる。善意の固まりのようなアメリカ人船長（アマサ・デラノ）が、作品「ベニト・セレノ」で体験するのは、奴隷の国アメリカと無縁とは思われない奴隷船上での不気味で不可解な奴隷の反乱である。『詐欺師』では、敬虔なキリスト教徒でありながら、その一方で激しいインディアン憎悪に駆り立てられる矛盾に満ちた人物（モアドック大佐）が語られている。闇へのこだわりは尋常ではない。

長詩『クラレル』（1876）の南北戦争の敗残将校（アンガー）のことばは、この闇の世界を集約するかのようである。作家としての長い沈黙の後で出版されたこの詩は、アメリカの神学徒（クラレル）の聖地パレスチナの旅を語る一種の巡礼詩である。巡礼の途上、旅の一行の間では、キリスト教信仰を中心に、諸々のことが議論される。その一つに、新世界アメリカがある。しかし、議論の色調は概して暗い。敗軍の将として聖地を巡るアンガーによれば、南北戦争を経た後の新世界アメリカは、「無数の者が小人（こびと）を演じる/下劣な平等の世界」（第 4 部 21 歌）であり、「低俗科学」に毒された「神を忘れた愚か者たち」〔同〕が生きる世界である。しかも、将来予想されるのは、「アングロ・サクソンのシナ帝国」というべき「民主主義の暗黒時代」（同）でしかない。神との契約に基づく乳と蜜にあふれた明るい国の姿は、どこにも見当たらない。

しかし、注目したいのは、闇の世界を追うメルヴィルが、同時に光の世界への期待や希望も示唆していることである。『クラレル』の場合も例外ではない。神学

徒クラレルは、「コロンブスは地上のロマンスに終止符を打ち/もはや人類に新世界はあり得ない」(第4部21歌)という絶望的なことばを口にする。しかし、「エピローグ」では、このクラレルに対し、「心を強く持て、クラレルよ/お前の心、そこにのみ目を向けよ/そして、雪の下から芽を出すクロッカスのように/...荒れ狂う海から現れ出て/死は生を勝利へと導くことをあかすのだ」ということばが語られる。長大な巡礼詩の掉尾のことばである。「勝利」としての「生」を求めることへの優しい激励のことばである。力強い希望のことばとも読み取れる。

この流れはメルヴィルの最後の作品にも見て取れる。死後出版の遺作『ビリー・バッド』は、無実の罪で絞首刑となる無垢の青年(ビリー・バッド)の物語である。青年ビリーは、「堕落以前の若いアダム」(2章)であり、「高潔な野蛮人」(同)である。しかし、汚れを知らないこの青年には、さながら「原罪」のように、ただ一つ、肉体的欠陥がある。「どもり」である。ところがこの「どもり」がひきがねとなり、蛇のように狡猾な上官(クラガート)の犠牲となる。結果として、軍法会議で死刑となる。犠牲となったビリーは、「真の僧侶」(22章)のように高潔な艦長(ヴィア)の宣告を、静かに受け入れ、朝の陽射しを受けつつ、従容として処刑の帆桁に向かう。これが筋書きである。物語の設定は1797年、フランス革命後のヨーロッパ社会の不穏な情勢の中で、艦長ヴィアは、軍律をことさら厳しく守らなければならない立場にあった。

ビリーの物語は豊かな象徴性を孕んでいる。人間関係のもつれ話しでもあり、管理職の組織運営の話しでもある。同時に、アダムとサタンのエデンの園の物語として読むこともできるし、息子イサクを神に捧げる父アブラハムの物語として読むこともできる。もちろん、明るく陽気で堕落を知らない高潔な蛮人ビリーを、神が約束したカナンの地としての新世界アメリカに重ねてみることも可能である。このとき、アメリカ(ビリー)の運命を静かに見つめる晩年の作家メルヴィルの視線には、高貴なまでの優しさがにじみ出てくる。

この優しさはどこから来るものなのか。また、アメリカ人としてのメルヴィル自身と、どのように関わるものなのか。

4. 茶会のインディアン

作家メルヴィルの生い立ちに目を向けるとき、注目したい場所が3つある。ボストン、オールバニー、そしてニューヨークである。

アメリカ東部、いわゆるニューイングランド地方を含む地域に位置するこれら3つの町は、いずれも、新世界アメリカの成長と発展に深く関わる場所である。1630年に清教徒たちによって築かれた町ボストンは、周知のように、アメリカの

政治、経済、文化の揺籃の地であり、ハドソン川上流の町オールバニーは、ニューヨーク州の州都であるだけでなく、1754年のフレンチ・インディアン戦争の際には、北米7つの植民地軍の総司令部が置かれた歴史の町でもある。一方、ボストンよりも古く、1614年に、オランダ人が毛皮貿易を目的として入植したマンハッタン島の旧オランダ領ニューアムステルダムは、1666年の第二次英蘭戦争を経て、イギリス領ニューヨークとなり、以後、アメリカだけでなく、世界の貿易経済の中心都市となる。メルヴィルは、さながら三角形をなすこれら3つの町と、深く関わりながら成長する。

2001年9月11日、マンハッタン島の先端部に屹立する世界貿易センタービルに、2機の旅客機が相次いで突入した。2棟の高層ビルが次々と崩壊していく様相が茶の間のテレビで流されたとき、作家メルヴィルを思い浮かべた人は少なくない。目の前に映し出された光景は、さながら巨大な白い鯨と復讐の狂気に駆られる隻脚の船長との闘いそのものと映った。それだけではない。この物語を世に送った当の作家メルヴィルは、1819年8月1日、8人兄弟姉妹の3番目の子（次男）として、崩壊した貿易センタービルがあったすぐ近くの場所（パール・ストリート6番地）で生まれている。

鯨と船長の物語の語り手はイシュメイルである。この名前には、旧約「創世記」の故事に照らして、「孤児」の意味が含まれる。ここには書き手メルヴィルの姿も重なり合う。貿易商の子として生まれたメルヴィルは、1832年、13歳の時、一種の孤児となる。父（アラン・メルヴィル）を亡くすのである。父の死は、莫大な負債と過労による精神錯乱によるものであった。以後、メルヴィル一家は、露頭に迷う。その中でメルヴィルは、海に出る。イシュメイルと同じである。

このような生活の中でメルヴィルは、とりわけボストンとオールバニーという二つの場所に馴染んでいく。海辺の町ボストンは父の実家のある町であり、ハドソン川上流のオールバニーには、母の実家があった。しかも、どちらの家も、その地域の誰もが認めるような、名門、名家といえる家であった。育ち盛りのメルヴィルの生活は、父の事業の不安定さもあり、決して平坦なものではなかった。その中でしばしば訪れた実家での体験は、大きな想い出として作家メルヴィルの記憶の中に残っていく。この記憶の中で、とりわけ大きな比重を占めるのは、二人の祖父の存在である。ともに誇りに満ちた祖父であった。

1829年の夏、10歳のメルヴィルは、ボストンのビーコン・ヒルの近くにあった父の実家（グリーン・ストリート20番地）を訪れる。訪れた孫を喜んで迎えた祖父（トマス・メルヴィル）は、いつもの散歩にメルヴィルを連れだし、ボストン・コモンを経て、オールドサウス教会、ミルク・ストリート、ヒル要塞、そしてグ

リフィン埠頭へと、まだ幼い孫息子を案内する。いずれも植民地建設や独立戦争というボストンの歴史と深く関わる場所である。じつはこれらの場所は、独立戦争当時、いま孫を連れて散歩している祖父自身が、歴史の一員として、直接関わった場所でもあった。さながら歴史探訪の趣のあるこの散歩は、成長期に向かいはじめていたメルヴィルにとって、心躍るものがあったに違いない。祖父の息子である父（アラン・メルヴィル）は、日頃から子どもたちに、この祖父の「覇気にみちた勇敢な行為(daring chivalric deed)」を見習うようにと、折に触れ語っていた。

祖父トマス・メルヴィル（1751-1832）は、アメリカ建国の歴史と関わるボストンの名士であった。1773年12月16日、停泊中のイギリス東インド会社の船を、インディアンに擬装した植民地人が襲撃し、積荷の紅茶を湾内に投棄する。このとき襲撃した仮装インディアンの中に、当時22歳の祖父トマス・メルヴィルもいた。フレンチ・インディアン戦争（1754-63）による財政危機を避けるため、本国イギリス政府が植民地への課税政策を進めたとき、北米各植民地では、それに対抗するものとして愛国急進派組織「自由の息子たち(Sons of Liberty)」が結成された。いわゆる「ボストン茶会事件（the Boston Tea Party)」を起こしたのは、この組織であった。祖父トマスは、サミュエル・アダムズを指導者として1765年にボストンで結成されたこの組織に、その一員として加わっていた。

スコットランド移民の子として生まれた祖父トマスは、先祖に倣って、当初、牧師職を目指していた。しかし、曲折をへて事業で成功を収めることになり、愛国組織のメンバーに加わった頃は、すでにボストンの有力者となっていた。アダムズらと連携した愛国的活動は、茶会事件の後も続き、1776年にはイギリス艦船撃退に加わり、1778年には、アメリカ独立軍の少佐として、隣州ロードアイランドに進撃している。これらの功績により、1776年にはボストン税関視察官、1778年には、初代大統領ワシントンにより、ボストン管区海軍長官の命も受けている。ちなみにこの職は、1829年にジャクソン大統領によって罷免されるまで、40年を越える長年に亘って務めた要職であった。この間、1825年には、バンカーヒル記念碑建立のためにアメリカを訪れたフランス軍司令官ラファイエット侯爵が、トマスの家も訪れている。メルヴィルが祖父と散歩に出た4年前のことである。侯爵の訪問は祖父の名士ぶりを十分に示している。

名士トマスは散歩のとき、昔の軍服と三角帽子という、一風変わったいでたちであったという。懐古趣味というべきこの姿を町中で眺めていた若者の一人に、後の作家オリバー・ウェンデル・ホームズ（1809-94）がいる。1831年、当時22歳のホームズは、散歩する奇妙な風体の老人トマスをうたった詩「最後の一葉

(The Last Leaf)」を発表している。いかにも若者の詩らしく、80 歳を迎えたかつての闘士の姿を、冷やかし半分にうたうものである。しかしそこには、老英雄に対する若者らしい敬意の表明も読み取れる。

I know it is a sin
For me to sit and grin
At him here:
But the old three-cornered hat,
And the breeches, and all that,
Are so queer!

And if I should live to be
The last leaf upon the tree
In the spring,
Let them smile, as I do now,
At the old forsaken bough
Where I cling. (ll.37-48)

この詩が発表された翌年、1832 年、トマスは 81 歳で死去する。社会奉仕の精神にあふれたトマスは、晩年にいたるまで市の消防団員としての活動を続けていた。皮肉にもこの活動が、病を得て息を引き取る直接の原因となった。この 1 年前の 1831 年には、息子である父アランが、親に先立ちあの世へと旅立っている。メルヴィルは、父と祖父との哀しい別れを連続して味わうこととなってしまった。アメリカ建国と深く関わった誇りたかい祖父との体験が、後の作家メルヴィルにとって大きな遺産となったことは確かだろう。

5. 砦の勇将

フィッツジェラルド (1896-1940) の作品『グレート・ギャツビー』(1925) の最終章は、ニューヨークの過去の歴史に触れている。ニューヨークを舞台とするこの作品の語り手は、17 世紀初頭、オランダ人が入植を目指してはるばる海を越えてやってきたとき、マンハッタン島付近の新世界は、「鮮やかな緑なす乳房」(9 章) のように映ったはずだという。

オランダ人の入植はマンハッタン島に始まる。毛皮貿易を目的としたこの入植は、やがてハドソン川流域の広大な地の開拓へとつながる。その流れの中で、ヴ

ァン・ワイク家、ヴァン・レンセラー家など、巨大な財をなす荘園領主的な一族が、次々と生まれる。オールバニーの町も、この過程で建設される。メルヴィルの母（マリア・ガンズヴォート）の実家は、この町にあった。先祖は、やはり17世紀にこの地に入植し、ビールの製造で成功を収めたオランダ人であった。

ニューヨークから北へ約200キロ、ボストンから西へ約200キロ、ハドソン川上流のこの町は、ボストン以上にメルヴィルが親しく接した町である。10歳でボストンの祖父を訪ねた時、じつはメルヴィルは、オールバニーの母の実家からボストンへと向かっている。陸路はるばる馬車に乗った旅であった。これに比べれば、ニューヨークとオールバニーを結ぶハドソン川の船便は、はるかに便利な交通手段であった。このためオールバニーへの訪問も、自然に回数が増えることになった。しかも、メルヴィル一家は、父の経営が不振に陥った1830年、ニューヨークから逃げるように、オールバニーの母の実家に向かっている。以後、結婚を機に本気で作家を目指したメルヴィルが再びニューヨークに戻る1847年まで、オールバニーとその近辺は、長いことこの家族の生活の場となっていく。

作品『ピエール』は、オールバニーの実家とのつながりを色濃く反映している。『モウビィ・ディック』に続くこの作品は、海の作家メルヴィルが初めて世に問う陸の物語であった。しかし、難解な哲学的言辞や近親相姦のタブーに触れる内容であったためか、読者から無視される作品となってしまった。しかし、田舎の名家に育った一人の青年を巡る物語は、子どもの頃からメルヴィルが母の実家で聞かされてきたに違いない家族の歴史を彷彿とさせるものである。

主人公ピエール・グレンディニングが住むのは、緑あふれる邸宅「サドル・メドウズ」である。父不在のグレンディニング家の一人息子ピエールは、ここで成長し、青年となる。母子家庭の生活の中で、二人を支えるのは、「この上なく誇り高く愛国的なグレンディニング家の歴史」（巻1）である。じつはサドル・メドウズは、家族にとって歴史的ないわれのある場所にあった。この場所は、「植民地時代のはじめ」に「インディアンとの戦争があった場所」（同）であったが、その戦争では、「ピエールの父方の曾祖父」が、「瀕死の重傷を負ったものの、落馬して息を引き取る直前まで闘う姿勢を示していた」（同）という場所であった。しかも、ここから歩いて一日ほどの所には、次のように、「革命戦争」の時に、「祖父」が「インディアンや英国派や正規兵」に立ち向かって守り通したという「砦（要塞）」も控えている場所でもあった。

Far beyond these plains, a day's walk for Pierre, rose the storied heights, where in the Revolutionary War his grandfather had for several months

defended a rude but all-important stockaded fort, against the repeated combined assaults of Indians, Tories, and Regulars. (*Ibid.*)

メルヴィルは生前、母の父である祖父ピーター・ガンズヴォート（1749–1812）と、会ってはいない。メルヴィルが生まれたとき（1819年）、この祖父はすでに死去していたからである。しかし、しばしば訪ねた母の実家（ノースマーケット・ストリート46番地）には、この祖父の形見といえる調度品があふれていた。壁には、ワシントンやジェファーソンやウィリアム・ピットの肖像画が掛かっていたが、これと並んで、画家ギルバート・スチュアートが描いた祖父の肖像画も掛かっていた。その上、イギリス軍からの戦利品であるドラムや、祖父が指揮した部隊の軍旗、戦場用折りたたみ式ベッド、軍服なども置いてあった。祖父ピーターは、さながら作品『ピエール』の「曾祖父」や「祖父」のように、確かにアメリカ独立戦争の闘士であったのである。メルヴィルは、母の実家を訪れるたびに、このことを強く意識したに違いない。

オールバニーから西へ約150キロ、ニューヨーク州ローマ市の町中に、国有記念物スタンウィックス要塞（Fort Stanwix）がある。1777年、この要塞にこもった植民地軍を、掃討作戦を展開中のイギリス軍が包囲する。イギリス軍には、インディアンや国王派の兵士も戦闘員として加わっていた。イギリス軍から出された降伏勧告を、植民地軍が拒否したため、連合イギリス軍の猛攻が始まる。しかし、植民地軍はこれによく耐え、駆けつけた援軍の助けを得て、最終的にイギリス軍を北方カナダ方面へと撃退する。この時、要塞で植民地軍の指揮をとったのが、民兵に加入して以来アメリカ独立戦争に関わってきたメルヴィルの祖父ピーター・ガンズヴォート大佐であった。

ボストンの祖父と同様、母方のこの祖父も、国家建設への功績により、その後多くの栄誉に包まれる。要塞死守の功績に対してオールバニー近郊の土地が与えられ、ジェファーソン大統領やマディソン大統領から、北部軍代表や国軍准将という要職に任命されている。1812年、バージニアでの軍法会議からの帰路、63歳で病没するが、軍人としてのこのような輝かしい生涯を見る限り、作品『ピエール』にみられる家系への誇りは、やはりメルヴィル自身のそれと重なるところが大きいといわざるを得ない。

6. むすび

1825年6月、ボストンの祖父を訪ねたラファイエット侯爵は、じつはその前にオールバニーの祖父の家も訪れている。独立戦争を支援したフランス軍司令官が、

戦争の火元となったボストン茶会事件の当事者と、独立を死守した要塞の指揮官を、ともに訪ねたのである。メルヴィルが生を受けたのは、このような家系の家であった。母の実家を訪ねたとき、幼いメルヴィルは、兄とともに、かつて侯爵が立ったのと同じ場所に立って、壁に掛けられた祖父の肖像画と対面したという。胸中は誇りに満ちたものであったに違いない。

しかし、この誇りが生涯そのまま維持されるということには、必ずしもならない。『ピエール』のグレンディニング家の誇りの一つは、戦争の敗残者であるインディアンの指導者「残虐な混血のブラント」(巻1)が、戦後、敵将であった「祖父」と友好関係を築いたことであった。誇り高い勝者と残虐な敗者との間に高貴な関係が成立したことである。しかし、スタンウィックス要塞をめぐる現実の戦闘では、敗走するインディアンの指導者(ジョセフ・ブラント)を追撃した植民地軍が、ブラントのインディアン部落を襲撃し、婦女子を含む多くの者を殺害したことが報告されている。

歴史上の人物ブラントは、『ピエール』の人物と重なるかのように、戦後、祖父ピーターの親戚筋の軍人に世話になることがあったという。そのときのブラントは、多くを語ることはなく、インディアンとしての矜持を静かに貫いたという。しかし、負け組となったインディアン領袖の胸の内が、過去の体験に触れることさえ拒否するような苦々しいものであったことは、後にブラントと接することがあったガンズヴォート家の別の親戚の者が伝えている(エピグラフ参照)。

アメリカに対するメルヴィルの思いは深い。作品中での言及の多さはこの証左である。思いの根底には、新国家の高い理念への誇りや、世界の中での役割への期待感が見てとれる。匿名で投稿されたエッセイ「ホーソーンとその「苔」」(1850)の中で、メルヴィルは、先輩作家ホーソーンを、シェイクスピアと対抗できるアメリカの天才として熱烈に讃える。当時メルヴィルは『モウビィ・ディック』を執筆中であった。しかし、隣人として出会った先輩作家の作品を読み、そこに潜む圧倒的な「黒い力 (the power of blackness)」に、大きな衝撃を受けたからである。これについて語ることは、後輩作家メルヴィルにとって、一種の義務であり、「イギリスへの文学的ゴマスリの酵母を取り除く」というアメリカ人としての「愛国的思い」でもあった。この思いは、二人の祖父が若くして抱いたアメリカへの思いと、根底でつながるはずのものである。

しかし、この思いが、「闇」を隠す側面があることも、作家メルヴィルは意識している。作品『イスラエル・ポッター』(1855)は、独立戦争時の英雄で、アメリカ海軍の創設者とされる勇将、ジョン・ポール・ジョーンズ(1747—92)について触れている。しかし、作中で提示されるジョーンズの人物像は、「猛烈な野心家、

大胆にして奔放、向こう見ずでどん欲、顔は文明、心は野蛮」（19 章）というものである。そして、「アメリカ」は、「世界のポール・ジョーンズ」であり、「これからもそうかもしれない」（同）のである。歴史の現実をたしかにメルヴィルは作品中に取り込む。しかし、アメリカの過去と未来を見つめるその視線は、やはり単純なものではない。

Sources

The Writings of Herman Melville. 15 vols. Ed. Harrison Hayford, et al. Evanston and Chicago: Northwestern Univ. Press and the Newberry Library. (Quotations are from this edition.)

Arvin, Newton. *Herman Melville.* Westport: Greenwood Press, Publishers, 1972.

Bryant, John, ed. *A Companion to Melville Studies*. Westport: Greenwood Press, 1986.

Delbanco, Andrew. *Melville: His World and Work.* New York: Vintage Books, 2006.

Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America.* New York: Oxford Univ. Press, 1964.

Miller, Edwin Haviland. *Melville.* New York: G. Braziller, Inc., 1975.

Parker, Hershell. *Herman Melville: A Biography*. Volume 1, 1819–1851. Baltimore: Johns Hopkins Univ. Press, 1996.

Robertson–Lorant, Laurie. *Melville: A Biography*. New York: Clarkson Potter, Publishers, 1996,

(岩手大学名誉教授)